

生駒市文化財調査報告書第9集

# 生駒市埋蔵文化財調査概報

1989

生駒市教育委員会

## はじめに

生駒市では昭和62年度に実施した生駒市内遺跡分布調査によって70ヶ所以上におよぶ遺跡の存在を確認しました。開発による遺跡の破壊など埋蔵文化財についてのさまざまな問

題が起ころります今日、やむをえず破壊が免れない場合において遺跡の記録保存につ  
とめるため、昭和63年度埋蔵文化財調査概報を発刊いたしました。

千年あるいは数百年前にこの地で生きた先人たちの残した郷土の遺産にふれ、歴史を見  
つめなおし、文化財を守り伝えるこころを育む一助になればと存じます。

今回の報告書を発刊するにあたりご教示、ご協力を賜りました多くの方々に、心からお  
礼を申しあげますとともに、今後とも本市文化財保護行政にご理解、ご指導を賜ります  
ようよろしくお願ひ申しあげます。

生駒市教育委員会  
教育長　坂本嘉彦

## 例　　言

1. 本書は、生駒市教育委員会が昭和63年度に実施した埋蔵文化財調査の概要報告である。
2. 調査は、本市教育委員会社会教育課 錦 好見・郷土資料館木村篤史を担当者として、昭和63年4月1日に着手し、平成元年3月31日に終了した。
3. 調査にあたっては、東前平治氏、上野重治氏、宗教法人寶山寺、株式会社長楽園より多大な御理解と御協力を賜った。
4. 調査及び本書の作成にあたっては、下記の方々より多大なる御指導・御協力を賜った。記して感謝の意を表します。

奈良国立文化財研究所・埋蔵文化財センター発掘技術研究室 西村 康、大谷女子大学 中村 浩、奈良大学 水野正好・酒井龍一、岡山市教育委員会 草原孝典、堺市博物館 井上 薫、近畿日本鉄道株式会社、株式会社地海設計、生駒市関係各課（順不同・敬称略）

5. 本書の作成・編集は、錦 好見・木村篤史が行った。
6. 出土遺物等は、生駒市山崎町 生駒市郷土資料館で保管している。

## 本文目次

はじめに	
例言	
I. 発掘届出の状況	1
II. 田原口城跡試掘調査	2
III. 金比羅窯跡試掘調査	3
IV. 俵口町平条所在遺跡試掘調査	4
V. 寶山寺試掘調査	4
VI. 生駒山北方窯跡分布調査	4
VII. 俵口町水池跡発掘調査	11

## 図版目次

図版 1	田原口城跡
図版 2	金比羅窯跡
図版 3～5	俵口町所在水池跡
図版 6～8	出土遺物

## I. 発掘届出の状況

生駒市では、昭和62年度に実施した遺跡分布調査をもとに作成した遺跡地図により開発にともなう土木工事等にたいして発掘届の届出の徹底を図り、調査を実施している。

昭和63年度の届出は下記のとおりである。

1. 発掘届出・通知件数

種別 年度	59	60	61	62	63
立会調査	1	—	1	—	7
発掘調査	1	1	1	5	5
未 調 査	—	—	—	—	1
合 計	2	1	2	5	13

(平成元年3月末現在)

2. 踏査願一覧表

申 請 者	申 請 地
翻拓洋社	高山町 6292 番地
翻長楽園	俵口町 820・822 番地
日コンハウス工業翻	緑ヶ丘 1420・1426 の一部

3. 調査一覧表

申 請 者	申 請 地	原 因	備 考
市土木課	高山町傍示	河川改修	立会 遺構遺物無
市土木課	高山町大北・奥の谷	河川改修	延期
市水道局	高山町宮方	水道管敷設	立会 遺構遺物無
東前平治	東生駒1丁目312番地	共同住宅	遺跡発見
小平尾町水利組合	小平尾町264-1-2	溜池擁壁	立会 遺構遺物無
辻町水利組合	辻町15番地	溜池擁壁	立会 遺構遺物無
市水道局	高山町井上地内	水道管敷設	立会 遺構遺物無
翻長楽園	俵口町820・822番地	共同住宅	遺跡発見
上野重治	俵口町803番地	個人住宅	試掘 遺物出土
愛和建設翻	西菜畑1791-4番地	分譲住宅	立会 遺構遺物無
市清掃センター 建設室	俵口町2116-91番地	焼却場建設	本調査 遺構遺物出土
市都市計画課	西松ヶ丘1551-1番地	公園造成	試掘 遺構遺物出土
翻寶山寺	門前町2494-1番地	寺務所増築	試掘 遺構遺物無

## II. 田原口城跡試掘調査

調査地 生駒市俵口町803番地

調査期間 昭和63年11月8日

事業概要 個人住宅増築

事業者 上野重治

### 位置と環境

本調査は、個人住宅の増改築にともなう試掘調査である。

調査当該地は長福寺のある丘陵の東端に位置し、付近には窯跡および中世から近世にわたる遺物散布地がある。

### 調査の概要

調査は施工面積20m<sup>2</sup>に対して2×1mの範囲で実施した。層序は地表面下約50cmの黄褐色粘質土(地山)上に、褐灰色粘質土、灰黄色粘質土、表土の順に堆積し、褐灰色粘質土中より瓦器片・土師質器片・須恵器片が出土した。遺構は地山を掘り込む長さ50cm・深さ13cmの土壤、径12cm・深さ13cmのピットを検出した。埋土は土壤・ピットとともに黒褐色粘質土である。



調査地点位置図 (1 : 5000)

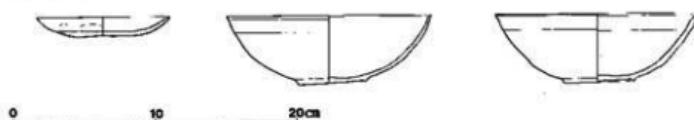
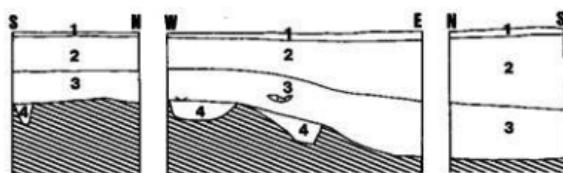


図1 出土遺物実測図



1. 表土

2. 灰黄色粘質土

3. 褐灰色粘質土

4. 黒褐色粘質土

図2 土層断面実測図 (1 : 40)

### III. 金比羅窯跡試掘調査

調査地 生駒市西松ヶ丘1551-1番地

調査期間 平成元年2月8日～2月20日

事業概要 児童公園建設

事業者 生駒市

#### 位置と環境

本調査は、生駒市西松ヶ丘児童公園建設にともなう試掘調査である。

調査当該地は、付近に長命寺北窯跡・長命寺西窯跡・妙心寺窯跡群がある。

#### 調査の概要

調査は、3本のトレンチを設定し90m<sup>2</sup>について発掘した。

トレンチ1 トレンチ西半部より、焼土・還元土・土壤・遺物を検出した。遺構は、東西方向に土壤が並んでおり、埋土は炭・焼土・砂まじりの明赤褐色粘質土である。遺構内より還元土・須恵器片が多数出土した。

トレンチ2 トレンチ南半部より東西方向に延びる溝を検出した。溝の埋土は黄橙色粘質土まじりにぶい橙色粘質土・灰白色砂である。遺物は溝底より須恵器片が出土した。

トレンチ3 地表面下2mまで掘り下げたが、地山は検出されず。層序は橙色粘質土・黄橙色粘質土・にぶい橙色粘質土の順に堆積する。



図3 出土遺物実測図

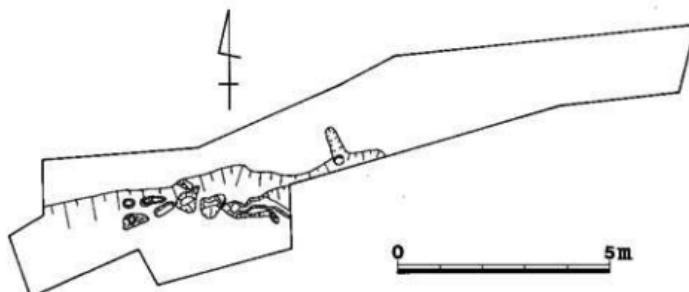
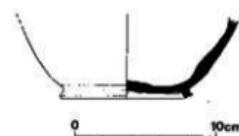


図4 Tr. 1 平面図

#### IV. 俵口町平条所在遺跡試掘調査

調査地 俵口町820・822番地

調査期間 平成元年1月28日

事業概要 共同住宅建設

事業者 株式会社長楽園

##### 調査の概要

本調査は共同住宅建設にともなう試掘調査である。調査は3本のトレンチを設定し80m<sup>2</sup>について実施した。各トレンチとも地表面下約2mまで掘り下げたが、地山は検出されず。層序は暗灰色粘質土・褐色粘質土・灰黄色砂・黄褐色粘質土・耕土・盛土の順に堆積する。遺物は黄褐色粘質土から須恵器片・瓦器片が出土している。

#### V. 寶山寺試掘調査

調査地 門前町2494-1番地

調査期間 平成元年3月29日

事業概要 寺務所建築

事業者 宗教法人寶山寺

##### 調査の概要

本調査は寺務所建築にともなう試掘調査である。調査3箇所のグリッドを設定し12m<sup>2</sup>について実施した。各グリッドとも地表面下2mまで掘り下げたが、地山は検出されず。層序は疊まじり黄灰色土・30cm大の疊まじり暗灰色粘質土・黄橙色まじり褐色粘質土の順に堆積する。

#### VI. 生駒山北方窯跡群分布調査

調査地 生駒市俵口町2112-2番地

調査期間 昭和63年9月2日

##### 調査の概要

生駒山北方窯は、生駒市俵口町2112-2番地にあり、生駒谷古窯跡群の中では、最も高い標高約260mのところに位置する。この窯は、昭和62年度に生駒市教育委員会が発掘調査を実施し、小形の平窯ほかを確認した。今年度は、その周囲の窯の存在を確認するための範囲確認調査をトレンチ発掘により実施する予定であったが、調査地が溜め池の堤防の下方にあたり、掘削による堤防の決壊の危険性があると思われ、発掘せずに地下の状況を確認する方法として磁気探査による確認調査を奈良国立文化財研究所に依頼した。

採集できた遺物は、調査地南区東端からコンテナ1箱分におよび、器種は蓋坏である。

今回の調査で窯跡の灰原と遺構の存在する可能性のある地点を確認することができた。

## 生駒山北方窯跡群の探査

奈良国立文化財研究所

埋蔵文化財センター発掘技術研究室長 西村 康

**測定の方法** 窯跡の探査には、作業能率や測定の精度からみて、現状では磁気探査が最も適当な方法と思われる。窯跡のように熱残留磁気を帯びた遺構は、地磁気の異常な地点として存在しているので、対象地全体の地磁気を測定してこの異常な地点を見いだせば、窯体位置が特定できるのである。地磁気測定に使用される装置は携帯型の磁力計であるが、これには2種類あり測定の原理が異なる。全磁力を測定する形式と、磁気傾斜を求めるものである。

本遺跡においては2種類の測定装置を使用した測定を、同一の測定範囲において実施して、両者の測定精度を比較する実験を兼ねた探査をおこなった。使用した装置は、全磁力を測定するにはG-856（アメリカ・Geometrics社製）2台、磁気傾斜の測定ではFM-18（イギリス・Geoscan Research社製）であった。後者はわが国においては、まだ十分な測定の実績が無いところから、本遺跡における応用実験は、装置の能力を確認するための、貴重な資料を提供するものと考えられた。

FM-18はフラックスゲート型（飽和鉄芯型）の磁力計で、コイル間隔は50cmである。すなわち、一軸の上下に別々にコイルを巻いた鉄芯があり、これらを電流によって逆向きに帯磁させ、釣合いのとれた位相状態をつくる方式の装置である。ここにもし外部磁場からの異常がもたらされると位相がずれ、その大きさに比例した電圧が生じるので、これを増幅して記録すると、磁場の強さを測ることができるのである。この原理の装置では、ある測点における磁気傾斜を測るので、測点毎の磁気成分（Gradient）を求めるものと理解できる。FM-18では磁気の強さを、 $10, 1, 0.1 \text{nT}$ （ナノテスラ）単位で測定できるが、今回の測定では、 $1 \text{nT}$ の測定単位を選んだ。また、内部には4000点のデータを自動記録する能力をもっているので、測定に際してはこれを携行して測点毎にスイッチを押せば、測定値を自動記録できる。測定は、歩く程度の速度で可能なのである。

G-856は地球磁場の全磁力を測る装置である。測定の精度は $0.1 \gamma$ （ガンマ）で、これも1000点の測定値を自動記録できる。従来遺跡の磁気探査に使用されている装置は、 $1 \gamma$ の精度が普通であるので、 $0.1 \gamma$ の読み取り精度のあるこの装置によって、今までとどの様に違う結果がえられるかを、比較するのも実験での検討点であった。これを用いた探査で2台を使用するのは、ノイズに影響されない測定法をとるためである。

すなわち、1台のみを使用した測定では、時間の変化によって生じる地磁気の変動や、

自動車や電車のように移動する鉄製品からもたらされる不規則な磁気変動がそのまま観測値の中に加わっているので、測点における真の地磁気の値をえられない。2台を使用する測定法では1台は定点として固定しておき、他の1台が測定区内を移動して測点毎に地磁気を観測する。移動点では磁気を感知するセンサー部を支える棒を、測点毎に突き刺す作業が必要となる。今回の測定では、移動点のセンサー高0.6m、定点は1.8mとした。

定点と移動点の2台は、ケーブルによって連結されているので、移動点でスイッチを押せば、2台は同時に読み取りをする。もし外部からのノイズがあったとしても、同時に等しい量のノイズの影響を受けていることになる。したがって、両者の観測値の差を求めれば、ノイズを差し引いた各測点毎の地磁気の、相対的な量を知ることができる。このような測定の方法を、2台連動法と読んでいる。

**測定の結果** 今回の測定では、測定の範囲を2部分に分割して実施した。これらは便宜的に、南に設定した範囲を南測定区、北のものを北測定区と呼称することにする。測定の密度は、南北測定区ともに1m間隔である。このうち南測定区では、FM-18およびG-856両者の測定を実施したが、北測定区ではG-856のみによる測定とした。これは北測定区の対象面積が狭いため、G-856による測定のみで十分な成果がえられると見られたことと、両者による比較実験の目的は、南測定区の結果をみれば達成されたと考えたからである。

以下に測定区毎に探査結果を報告する。結果を表示する図面は、G-856の測定では定点と移動点の観測値の差を、FM-18では測定値をそのまま使用して、コンターマップとして整理した。図中の表示単位は、G-856では0.1T、FM-18は1nTである。したがって、G-856による結果図中の、たとえば300は、30Tを表すことになる。図の外郭線上の1目盛りは、いずれも1m間隔である。また、図中の実線は相対的に磁気の強い部分を、点線は弱いものを表している。

**南測定区** 測定の範囲は、南北25m、東西15mに設定した大きさであるが、G-856とFM-18では測定面積が若干異なる。すなわち、G-856では設定した範囲全体を測定したが、FM-18ではこれの東北隅を起点に、南北20m、東西15mの広さのみを対象とした。両測定方法による重複部分は、FM-18による測定範囲に等しいのである。

なお、測定区の南半部にみられるデータの欠落は、小さな沢と急傾斜の崖面が存在するため、測定ができなかった部分である。また、北半部東辺の欠落部分も、凹地のため測定ができなかったものである。

G-856による測定では、測定区の北半部東辺と西北隅に大きな磁気異常のあるのが認められた（第5図A,a,b,c）。東辺の異常箇所は、この位置の南側斜面に、灰層とみられ

る遺物の散布があるところから、窯体に起因する磁気異常と考えた。この地点の東側は急斜面であり、北にも凹地があるため測定できず、異常の全体の形態は不明である。また、通常遺構が示す正と負が一対となった、双極子磁場も明らかでないため、窯体の方向や規模も、推定することができなかった。

もし双極子磁場の規模や形態が明らかであれば、遺構の埋まっている深さによって異なるが、正と負の異常の中間位置を目安にして、位置を推定することができる。つまり G-856の場合のような、全磁力測定では正の磁気異常は、実際に遺構が存在する位置よりも南に出現するので、これと異常の大きさを参考にして、おおよその位置を推定するのである。

なお、この磁気異常は窯体がもたらす異常としては規模が大きく、東側にある鉄製排水溝による異常が混在しているものと、見る必要があるであろう。

西北隅に存在する磁気異常は、いくつかの小規模な異常の集合とみることができる。その中では南に位置するものが、双極子磁場を形成していて、地下に遺構が存在する可能性を示すものである（第5図a）。これの北東で東西方向に2つの円が連なるように見える異常は、一体のものと見なすこともできるが、北が設定区外に及んでいるため、正確な形態などは推定できない（第5図b）。これらの他に、2箇所の磁気異常の間で、測定区西辺に接した位置にも、小規模な異常がある（第5図c）。小規模であるのは、他の2箇所の異常が大きいため、それらの影響を受けて明確な異常の形を、示していないものと見ることもできる。ここでは少なくとも3箇所の独立した、磁気異常があると見なすことができる。

しかしながら、この3箇所の存在する位置は、斜面やその裾部ではなく谷底の平担面部分に当たっており、窯体などの遺構を推定することは困難である。近年の焚火や塵芥を投棄した場所である可能性を考慮しておく必要があるであろう。南測定区では、いま述べた地点以外には顕著な磁気異常はない。

しかし、測定区全体の磁気分布を見ると、ほぼ北東から西南にかけて、徐々に磁気強度が減少していくことが判る。これは多分、地形の状況が反映されていて、西南の丘陵部になるに従って表土層が薄くなることを示していると考えられる。従来の1ガンマ単位の精度による測定では、このような微細な変化は、東北地方などある特定の地域を除くと、十分に捉えることができなかつたものであり、使用する測定装置の精度が高ければ、近畿地方においても地層の状況が推定可能などを、示唆するものとして注目されるのである。

FM-18による測定結果では、G-856で見たような磁気分布の形態をとらず、局部的な磁気変化が示されていることに気が付く。すなわち、この装置による探査では測定特性

がもたらす結果である。各測点毎の磁気傾斜が明らかになってはいるが、例えば地層変化などがもたらす、地磁気分布の傾向は知ることができないのである。しかしながら、G-856の結果と比較した場合、磁気異常の箇所を推定する際には、ほぼ同様の位置を特定できる。このことは、両測定装置共に熱残留磁気を帯びたような、大きな磁気異常を示す遺構の測定には、同程度の探査能力があることを証明するものである。FM-18による測定でも、G-856による結果でみたように、測定区の北半部東辺と西北部に磁気異常が指摘できる。

しかしながら、測定結果のありかたには、当然ながら、測定方法による特性の差が原因となった相違点がある。FM-18では、磁気異常を測定点の位置に即した磁気傾斜として記録するため、異常の地点はG-856でみた位置よりも北に現れることである。この装置の方が遺構の実際位置を捉えるうえでは、優れていることが予測できる。このような相違があるため測定区東辺にみる磁気異常の箇所は、G-856とほぼ同位置に指摘できるが（第6図A）、西北隅部においては先にみたように、異常の箇所を3箇所に限定することはできない。

FM-18による測定の結果によれば、西北隅では、ほぼ南北に線状に平行した、2箇所の磁気異常として捉えられている（第6図a, b）。しかし、西の異常は南側へも及んでいるので、G-856による結果と、それほど大きな違いがあるともいえない。磁気異常を2箇所と考えるのか、または3箇所とみるのかは、両方法による結果を総合しても、明確ではないといわざるをえない。

北測定区 南測定区の北端から約6m離れた北に設定した測定区で、南北10m、東西5mの範囲である。測定区の東側には、既に発掘調査の終了した窓体があるところから、隣接地にも窓体が存在する可能性を考え、探査したものである。ここではさきに述べたように、G-856のみによる測定である。

測定の結果を見ると、東辺に大きな磁気異常が2箇所ある（第7図a, b）。異常の大きさは、正負ともに数100アーティーをこえる値であるので、何等かの鉄製品に起因する異常と見られる。多分、既発掘の窓体を保護するために使用した鉄棒などが、原因になっているのであろう。したがってここでは、探査結果からは、遺構の有無についての推定はできない。

本遺跡における磁気探査の結果は、以上のことである。窓体の位置を特定する目的は、南測定区では達成されたものと考えるが、それ以外にも次のような成果がえられた点が注目されよう。すなわち、ここで使用した異なる2つの測定装置は、少なくとも熱残留磁気を帯びた遺構の探査においては、同等の結果がえられるということが、確認できたことである。そして、G-856による精密な全磁力探査が窓体以外の遺構の探査にも、有効である。

る可能性が示唆されたことは、今後の磁気探査における検討課題を提供したいという意味で、評価されるものであるということである。

使用した2つの測定装置の内、FM-18はこれを携帯するだけで、つまり歩く程度の速度で測定ができるところから、短時間の内に広範囲の測定が可能である。そこで実際の測定作業では、これを使用した測定をまず実施して、磁気異常の箇所を限定した後に、G-856による精密な測定で規模や形態を求めるという、2段階にわけた探査の方式を考えることができる。磁気探査にあっては、今後このような方法を採用することにより、より能率良くかつ正確な測定が可能となる測定方法を、考慮することが必要となると思われるのである。

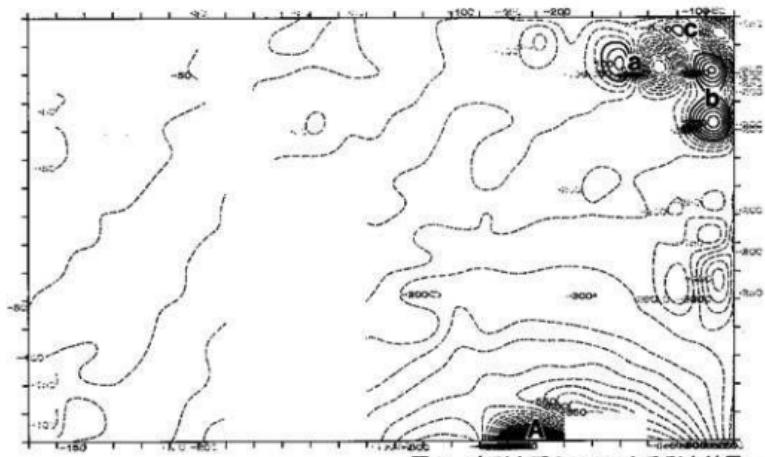


図5 南測定区G-856による測定結果

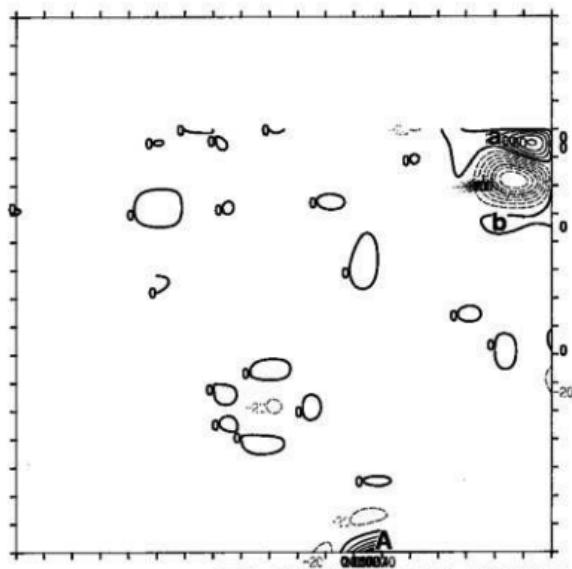


図6 南測定区FM-18による測定結果

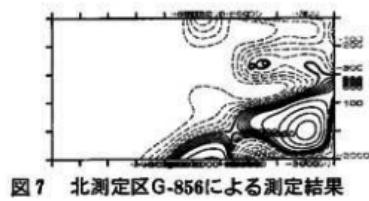


図7 北測定区G-856による測定結果

## VII. 傑口町所在氷池跡発掘調査

所 在 地 生駒市傑口町2116-91番地他

調 査 期 間 昭和63年12月8日～平成元年2月3日

事 業 概 要 一般廃棄物処理施設（ごみ）

事 業 者 生駒市

### 位置と環境

調査地は、河内平野と奈良盆地の間を南北に走る生駒山脈を形成する生駒金剛国定公園内の標高360mのところに所在する。生駒市内では最も西に位置し、信貴生駒スカイラインを挟んで東大阪市と接している。調査地は、南北方向に連なった尾根の間に生駒山頂の水系によってできた湿地帯であり、確認した氷池はこの水系に隣接して立地する。調査地から約1.5km南には賣山寺、般若窟があり、付近一帯は中・近世頃から修験道が盛んで、江戸時代賣山寺が開創されると、門前町が形成されるようになった。調査地の約100m北側には大阪から奈良に通じる山腹沿いの道があり、往時から賣山寺参詣或は大阪－奈良間を往来する人のための重要なルートであったと考えられる。また生駒山は花崗岩類で形成されていることから、地元の人々によると調査地付近は明治頃には花崗岩を切り出す石切り場であったといい、現在多くの痕跡が残っている。スカイラインを挟んだ大阪側の龍門地区では大阪城築城の際の石材を切り出していたとも伝えられており、位置的に近いことから何らかの関係が予想される。付近にも「三十四丁」の銘を刻んだ丁石、朝日地蔵と呼ばれる石造地蔵菩薩立像などがある。また標高250m以下の生駒山麓から連なる丘陵一帯は、奈良県下でも数少ない奈良時代の須恵器窯跡群が集中して存在する。

### 調査の概要

調査は分布調査により確認した氷池と思われる3カ所の長方形の石積み（高所からA・B・C）とその周囲に調査区を設定し1500m<sup>2</sup>について実施した。Aについてはスカイラインからの雨水排水路とゴミ及び土砂等の廃棄物により北西側が崩壊していた。B及びCについてはそれぞれ4辺とも存在していた。

調査は伐採後、抜根と表土除去を機械により行いその後は人力による掘削を行った。

### 氷池A

石垣は各辺 それぞれ 14.5m・11.3m・6.2m 残存しており、石積み高は60cm・45cm・60cmを測る。氷池内層序は表土の下に褐色粘質土、灰白色砂である。石垣底部隅に薄く黄橙色粘土が確認でき、漏水を防ぐために目張りしていたものと思われる。

### 氷池B

石垣は各辺それぞれ22.5m・8.5m・21m・8.5m、石積み高80cm・120cm・120cm・100cmを測る。S 001は幅40cm・深さ15cmを測るU字型の溝で、埋土は黒褐色粘質土である。溝内より残存長53cm・幅11cmの導水管として使用された樋と思われる木製品が出土した。S 002は長さ270cm・幅70cm・深さ15cmを測る溝で、埋土は黒褐色粘質土である。

### 氷池C

石垣は、各辺それぞれ14m・9.5m・13m・8.6m、石積み高120cm・120cm・150cm・110cmを測る。S 003は幅230cm・深さ15cmを測る溝であり、溝内より急須蓋が出土した。S 004は長さ90cm・深さ18cmを測る土壤、S 005は径25cm・深さ3cmのピット、S 006は長径40cm・深さ10cmを測る土壤、その他ピット（S 008～S 013）を検出した。

### まとめ

明治23年（1890）から大正（1912～26）初頭まで大和（奈良県）生駒郡北生駒村大字谷田（現生駒市谷田町）で造られた天然の「生駒氷」は、北海道函館で造られた氷について世間によく知られていた。今回、生駒市猿口町で調査した氷池（以下、氷池という）から知られた事柄は「生駒氷」製造に新知見を提供した。「生駒氷」に関する高田十郎氏の論考「大和の生駒氷」（『大和志』）にみられる製氷方法はつきのようである。

山陰か山蔭で、一日中、日の当たらない地を選び、高さ約3尺（約1m）の土手を築いてその地を囲い、土手の内側に打ち並べたクイの内面に板を張り、板囲いの底にきれいな砂を敷き、生駒川か支流の清い水を引き、深さ約2尺5寸（約76cm）までためる。

寒冷の日が3昼夜ぐらいつづくと、水面の氷の厚さは約1寸5分（約4.5cm）以上になり約15～16貫（約56.2～60kg）の体重の人が氷の上にあがっても、氷は割れない。水面を四角形の小片に切るために木の定規として縦約1尺5寸（約45cm）横約1尺2寸（約36cm）の木片を作り、ほかに長さ約2間（約3.6m）のスキ板を用意する。スキ板を池のフチにあて、フチから池の面へ約5寸（約15cm）のところに鎌先でスチを引く（その5寸幅の部分をフチキリという）。

フチキリの筋から内側の前面にスキと定規でゴバンの目を引く。フチキリの氷を引き上げて捨てるとき氷池の面の氷は、氷池の広さよりも周囲が約5寸（約15cm）ずつ狭い板になって池面に浮く。このさい、池全面が1枚の氷板では仕事がしにくいから、池の広さに応じ、先につけたスジに従って1ヶ所か2ヶ所を切り分ける。これを胴ギリといい、こうすると2ないし3枚の氷板となって氷に浮く。

胴ギリされた氷板のうち、土手に近い1枚をフチに引き寄せてると、その氷板ともとの氷板との間に約5寸（約15cm）のすきがあく。そのあいた所に2本の丈夫なクイを打ち、ク

イと土手の間に木で橋を架け、足場を作る。その橋板は引き寄せた氷板よりも約2~3寸(約6~10cm)高くしておく。橋の木材は、幅約1尺(約30.3cm)、厚さ約3~4寸(約10~12cm)、長さ約2間(約3.6m)ならば、2~3人がこの足場にのぼっても折れない。作業者は足場の上に俯向き、先に鎌でつけておいたスヂに従い、片っ端から鋸で氷を切ると縦約1尺5寸(約45cm)横約1尺2寸(約36cm)の氷板が水に浮く。

土手にいる「あげ手」の人が「ガンガリ」を使って氷板を引き上げる。ガンガリは、松の若木の茎に小枝がでているもののひと節を切り、節から上の茎約2尺(約60.6cm)を柄とし、元来上向きに出た小枝2~3本を3~4寸(約10~12cm)に切り残し、繩でからんで鎌の形としたもので、ものを引っ掛けるのに都合がよい。引き上げた氷は、Aの氷板が縦約1尺5寸・横約1尺2寸ならば、Bの氷板の縦・横の長さをその逆になるようにし、自分の傍に積む。

別の人気がこの氷板を一定の場所に運び、約一週間保存し、そのさい、3ないし5枚の氷板ごとに、短い竹のへら(氷板の幅よりも少し短い)2本ずつをはさむ。こうして高さ約6尺(約1.8m余)ずつに積み(これをキシという)、数個のキシを寄せ集めて四角の立体とし、蓬で囲い、雨を避け、約一週間たつと氷はよく固まり、カンカンになり、それを問屋へ出す。

生駒氷の製造は、明治23年(1890)中村由松氏が大阪府北河内郡四条村龍間(現大東市)で天然氷の生産を見て帰り、試みたのが始まりで、約20数年のあいだ製氷されたが、大正3年(1914)大軌鉄道(現近畿奈良線)の開通とともに、氷が不潔になったことあるいは人造氷の普及などのためすたれた。以上が高田氏論考の要点である。

今回の氷池の調査で特筆すべきことは、氷池の板囲いのかわりに人工的にカットした石が使われていた点で、これは、付近が石切り場であったことと関係があり、石積みの土手の遺構の調査例として注意を引く。遺物包含層に砂層が多いのは、高田氏がいう「氷池の底に敷かれた砂」に相当する。引水方法については、遺物中に木製の礁や鉄製導水管の破片を検出しており、遺構よりも下層に川の痕跡が確認されるので、川水を引き上げて水をためたと考えられる。なお、氷池Cの北東側にピット群が認められるのは、当氷池以前に構築された建物跡かあるいは当氷池にともなう施設跡であろうと考えられる。

参考文献 高田十郎「大和の生駒氷」(『大和志』第9巻第4号、昭和17)

井上 薫「都祁の氷池と氷室」(『ヒストリア』第85号、昭和54)

社団法人日本冷凍協会編『日本冷凍史』(昭和50)

岡部伊都子「氷室の里」(同氏『北白川日誌』、昭和49、新潮社)

図8 俵口町所在水池跡遺構平面図 (1:200)

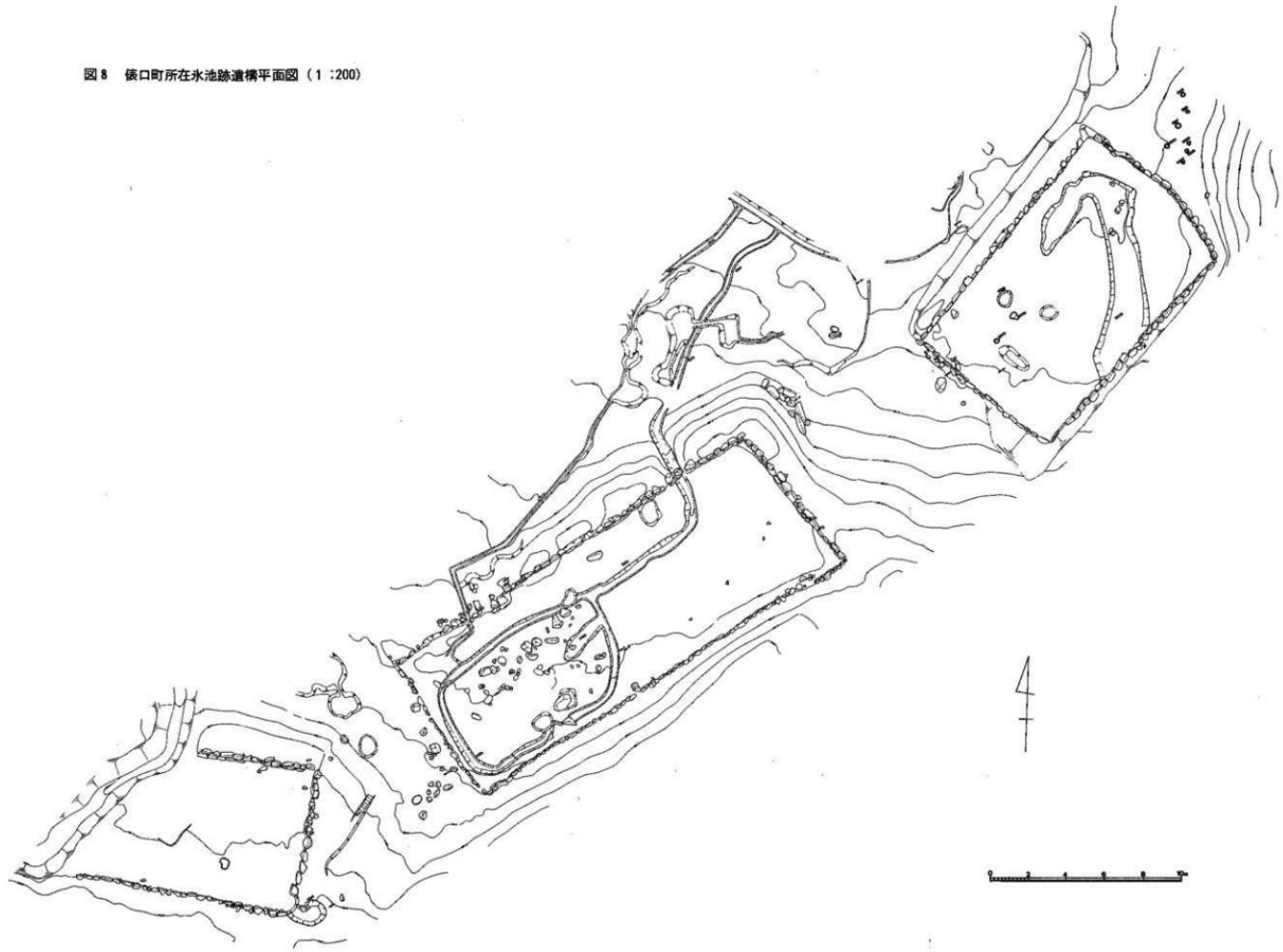


図9 氷池A・C石垣実測図(1:100)

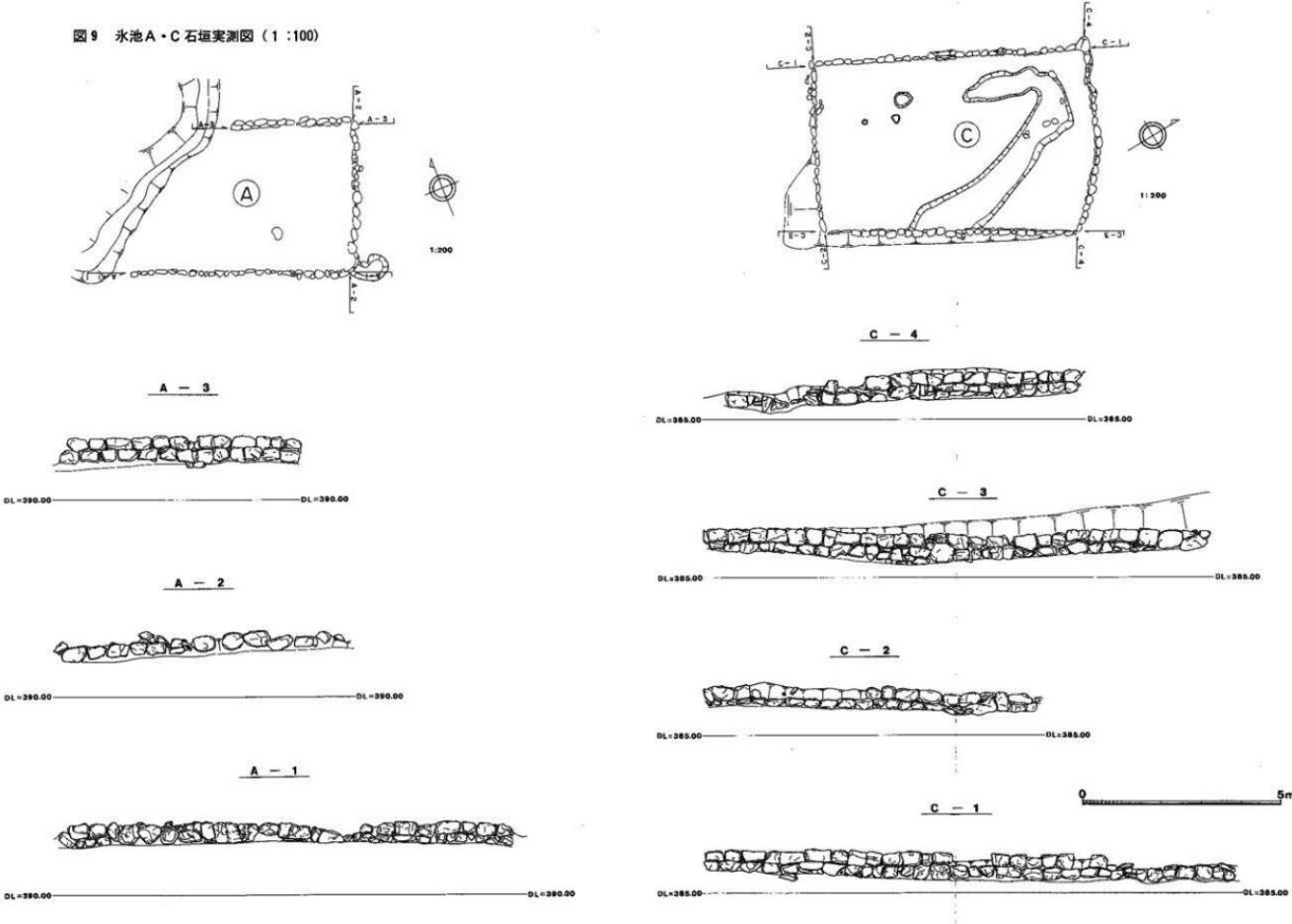
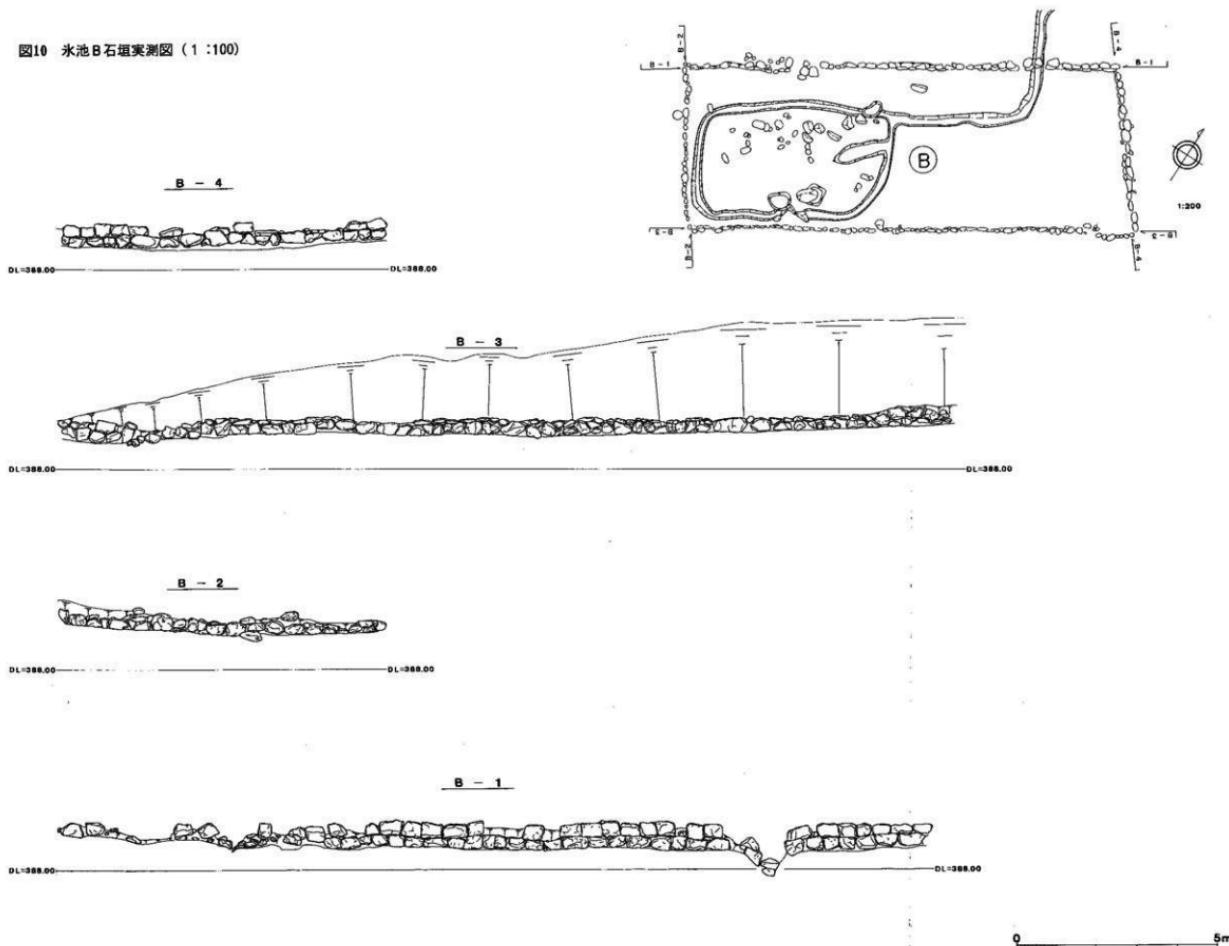
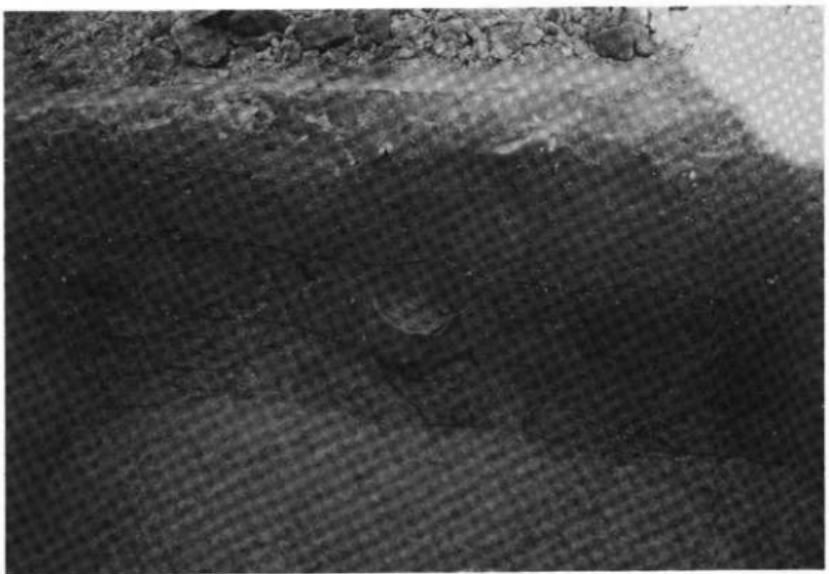


図10 水池B石垣実測図 (1:100)





土層検出状況



遺物出土状況



トレンチ 1 全景



トレンチ 2 溝検出状況



伐採後風景



氷池A 全景

図版4 傑口町所在氷池跡



氷池B 全景



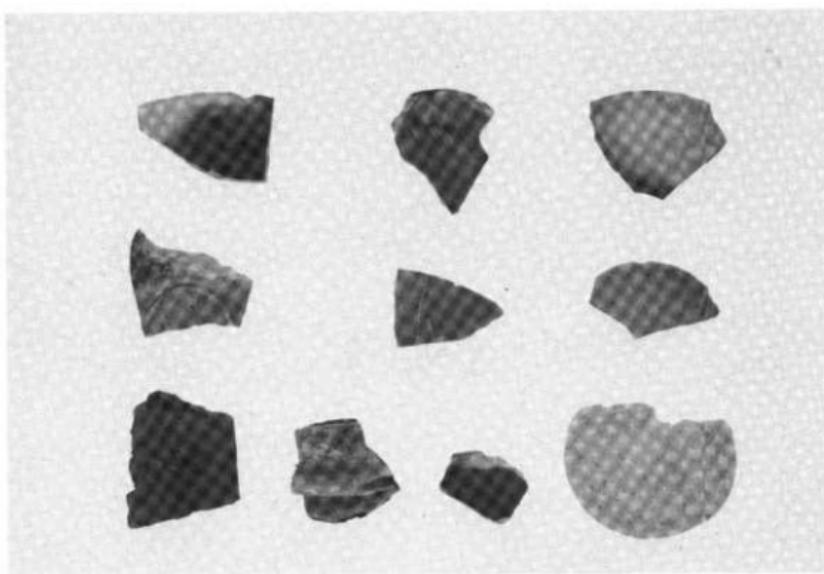
氷池C 全景



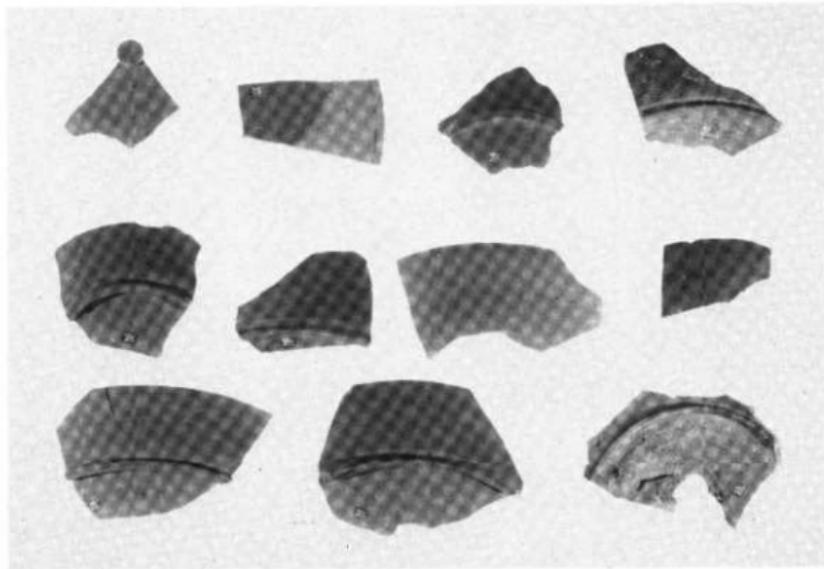
木製品出土状況（氷池B）



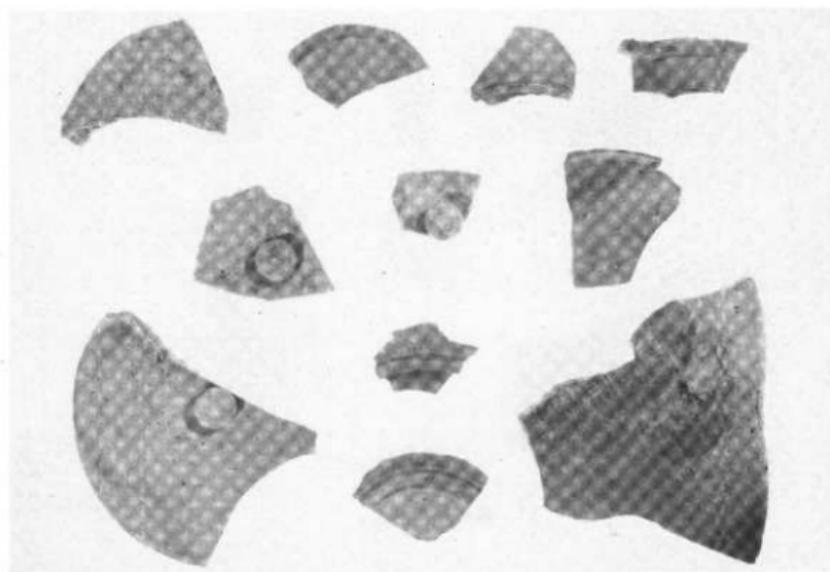
木製品出土状況（氷池B）



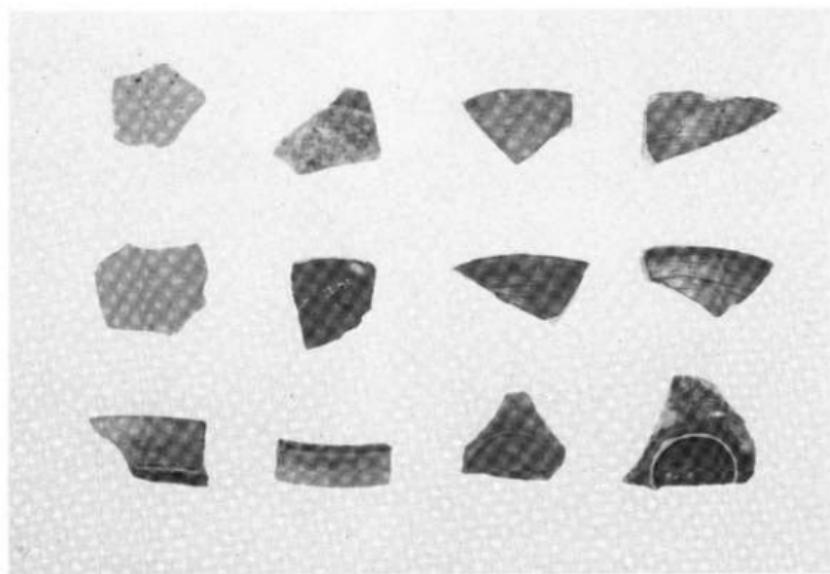
田原口城跡



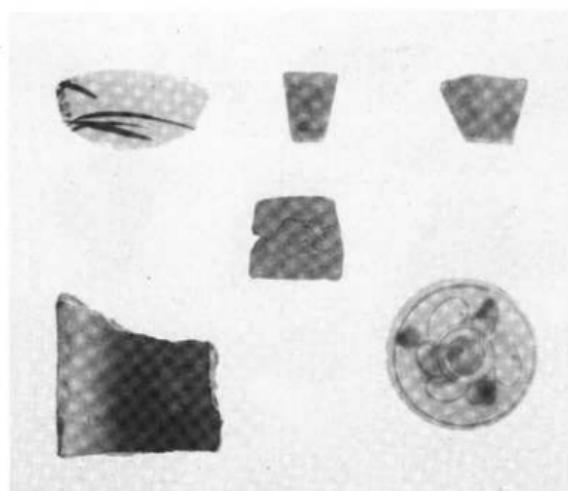
金比羅窯跡



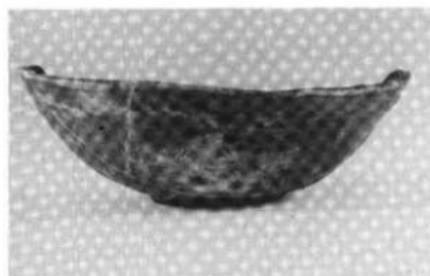
生駒山北方窯跡



俵口町平条所在遺跡



俵口町氷池跡



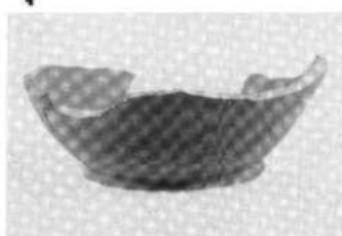
1



2



3



4

1・2 田原口城跡

3・4 金比羅窯跡

**生駒市文化財調査報告第9集**

**生駒市埋蔵文化財調査概報**

1989年3月31日

編集 生駒市教育委員会  
発行 奈良県生駒市東新町 8-38号

印刷 株式会社 昭文社  
奈良市柏木町 176-1